表紙の人

学生記者が取材・編集する大学広報誌 Hakumon ちゅうおう Chuo

# 期待のルーキー 初の春季リーグ戦で 新人賞受賞 プロ視野に、まずは体力づくり

硬式野球部（商学部1年）
**島袋洋奨**さん
（興南高校出身）

東都大学野球春季リーグ戦で、栄えある新人賞を受賞した。成績は5試合に登板して1勝3敗、防御率0・99。リーグ2位の防御率で、東都を代表する藤岡貴裕投手（東洋大学4年）、東浜巨投手（亜細亜大学3年）を上回った。ルーキーとしては立派な戦績だ。

## 「もうちょっと勝ちたかった」

だが、「正直もうちょっと勝ちたかったです。勝てる試合を負けてしまったのが、すごく悔しい。防御率が低いのは、他の投手より登板回数が少ないからで、自分が新人賞をもらっていいの？と思いました」と表情は今ひとつ晴れない。

周囲の期待度は高い。高校時代の昨年（2010年）、興南高校（沖縄）のエースとして、史上6校目となる甲子園春夏連覇の偉業を達成した「甲子園のスター」だからだ。甲子園で11勝、130奪三振の記録を残し、鳴り物入りで中央大学に入学し、硬式野球部寮に入寮した2月2日以来、マスコミからもその一挙手一投足が注目されている。だが、大学初勝利までの道のりは決して平坦ではなく、また長かった。

## 開幕戦で無念の黒星デビュー

4月5日対駒澤大学戦で、新人としては高橋善正監督以来、48年ぶりとなる開幕試合のマウンドに立った。2日前に高橋監督から初登板を告げられ、「試合の流れをつくりたい」と挑んだが、結果は5安打4失点（自責1）で4回に降板し、無念の黒星デビューとなった。その後も開幕戦を含め、先発して3連敗。4月21日の3度目の登板では、9回2死まで無失点と好投したが、同点打を許して、土壇場で初勝利を逸した。

負けず嫌いだけに、「大学デビュー戦で負けたときは相当落ち込みました」という。強く感じたのが、高校野球とは全く違う大学野球のパワーだった。「高校の金属バットが大学では木製バットになって、そんなに飛ばないと思っていたけど、違いました。高校では三振がとれていたコースがファウルにされたり、打たれてしまった」といきなり課題を突き付けられた。

## 落ち込み、先輩がアドバイス

開幕戦の試合前、寮で同部屋の副主将、西銘生悟選手（法学部3年）から、こうアドバイスを受けた。「お前は絶対打たれるから覚悟しておけよ。高校生で凄いって言われた選手でも、大学にくると最初は必ず打たれる。そこからみんな這い上がっていくんだ」。

黒星デビューとなり、落ち込んでいるとき西銘

選手から、またこう言われ、励まされた。「言っただろ。でも、ここから気持ちを切り替えることが大切だ。試合は続くんだから、気持ちを切り替えていこう」。２００８年春の甲子園で優勝した沖縄尚学高校の主将だった沖縄の先輩、西銘選手の言葉は重く響いた。

沖縄の家族からの電話にも支えられながら、連敗の中を苦しみ抜き、待望の初勝利を手にしたのは５月13日の対亜細亜大学戦。２００８年春の甲子園の優勝投手（沖縄尚学高校）の東浜投手との投げ合いとなったこの試合で、１対０と１点リードで９回を迎えた島袋投手は１死後連打されてラ

真剣な眼差しで春季リーグを振り返る

ンナー1、2塁のピンチに立たされた。島袋投手の頭を「ここで打たれたら、あの時と同じで同点に追いつかれてしまう」と嫌な予感がよぎった。

## 苦しみ抜いて得た初勝利

いたたまれずにマウンドに歩み寄った高橋監督は、島袋投手に「今日の試合の勝ち負けはお前で決めるから、延長戦になっても代えるつもりはない。だから思い切っていけ」と叱咤した。これが功を奏し、続く打者を二者連続三振に打ち取った島袋投手は、ようやく大学初勝利を手にした。

「勝ててほっとした。正直焦っていたのですごく嬉しかった」と素直に喜びを表す。マスコミ各社のインタビューを受け、大分時間が経って神宮球場を出てきた島袋投手をバス車内で待ち受けたチームメイトから、「お疲れ」「ナイスピッチング」と祝福の言葉が飛んだ。「本当にありがたかったです。ウイニングボールは、とっておいてくれた西銘さんからもらいました」。

大学初勝利の記念のウイニングボールを寮の自室にしばらく置いていた島袋投手は、「大切なので、無くなったら困る」と6月初めに3ヶ月ぶりに沖縄に帰った際に持ち帰り、生涯の記念として実家に大事に保管した。

トルネード投法の課題は「軸」

## 高橋監督の下で、と中大進学

「高校球界のエース」だった島袋投手が、いろいろ選択肢がある進路の中から中央大学への進学を決めたのは、「実力の東都大学リーグで試合をやりたかった。その中でも投手としてプロ野球で活躍され、投手コーチも長くやられた高橋監督のもとで、技術的な面を伸ばしていきたかった」からだ。

独特の左腕からのトルネード投法は、「小学校のときの監督に『お尻からぶつけていけ』と言われた」のがはじまりだった。高校2年で甲子園に出場し、周囲から「トルネードだ」と言われるよ

うになり、それから意識するようになった。

「僕の投げ方はちょっと変わっているので、体が開いたり傾いたりしちゃうんです」と自己分析する。「コントロールのことしか言われない」という高橋監督からは、「（体がブレないように）1本のまっすぐな軸を持って投げろ」と指導されているという。

## 高校で培った『和知魂』

島袋投手の育成について高橋監督は、4年計画で考えており、高校時代の恩師である沖縄・興南高校の我喜屋優監督からも、「1年で活躍しようと思うな。4年あるんだから焦らず、4年間で成長してこい」と言って送り出された。

「高校3年間で考え方が相当変わりました」と言う島袋投手は、教育者としても知られる我喜屋監督から野球の技術的な面だけではなく、人間性についても教えられた。興南高校の中庭には、『和知魂』（コンチワ）の碑がある。「魂を込め、知識を広げ、仲間たちの和、チームワークを大切にする」という教えだ。

とくに我喜屋監督からは「5感を活性化させて、第6感をつくれ」と言われ続け、「人生のスコアボード」を掲げて人間力を高めることでも教えを受けた。

沖縄を語るときは自然に笑顔が浮かぶ

興南高校野球部は「朝の散歩」を日課にしており、散歩が終わると恒例の「1分間スピーチ」がある。監督から誰が指名されるか分からないので、選手たちは散歩中にスピーチに備え、道端に咲く花を触ったり、匂いを嗅いだり、音を聞いたりと5感を活性化させる。一見、野球と関係ないようだが、島袋投手はこう言う。

「小さなことにも目を向けることで第6感が働き、大きなことにも気付くことができると教わっていました。試合でも相手のねらいに気付けるようになるんです」

## 下半身を鍛えて、体力づくり

島袋投手は身長173センチ、体重71キロで自己最速148キロ。目指すプロ野球で、憧れの選手は「ヤクルトの石川雅規投手です」ときっぱり。「石川さんは体が小さい（身長167センチ）からというのでなく、球が速く、インコースをつかってピッチングを組み立てているところが尊敬している」と理由も明確だ。

大学に入ってからは、体づくりに力を入れている。特に下半身を鍛えるため、自主的にウエイトトレーニングを取り入れている。「高校と一番違うのは自主的に練習をしなければならないことです。手を抜いたら落ちて行くだけなので、勝つための練習を自分でやっています」と自己管理は怠りない。

今年1年の目標に「1シーズンをしっかり投げる」ことを掲げ、そのために「体をつくり、変化球できちんとストライクがとれるようにしていきたい」と自らに課題を課している。

「東京は人が多いし、みんな急いでいて…。沖縄がいいです。海がきれいだし、住みやすいし、人が助け合っている感じがすごく好き」。沖縄の話になると、自然に人懐っこい笑顔が浮かぶ。そこには故郷を思うルーキーのさわやかさがあった。

（学生記者　宮寺理子＝法学部2年）

ROOKIE 期待のルーキー

# 14分切る5000mのベストタイム 目指すは兄と一緒に走る箱根駅伝

陸上競技部駅伝（法学部1年）**新庄翔太**さん
（兵庫県立西脇工業高校出身）

5000メートルのベストタイムが13分59秒61。駅伝新入部員13人のうち、14分を切っている選手は他にいない。上級生を交えた全選手のなかでも2位のタイムだ。いやがうえにも期待は高まる。

## 関東インカレ1500mで8位

5月に国立競技場で行われた関東インカレの1500メートル予選で自己新記録（3分50秒0）を出し、決勝に進出した。決勝では8位に終わったが、大学に入って初の大きな大会で、早くも存在をアピールした。5000メートルは14分12秒76と自己新を更新することはできなかったが、14位とまずまずの結果を出した。

「1年生らしくチャレンジしていこうという気持ちで走った。1500メートル予選でベストタイムが出たことで、決勝でも自信を持って思いっきり走ることができた」と振り返る。その一方で、5000メートルでは「テレビで箱根駅伝を走っているのを見ていた有名な選手と一緒に走って緊張した」と大学陸上のレベルの高さを実感した。

新庄翔太さん

## 環境の良さで中大進学決める

高校駅伝の名門、兵庫県立西脇工業高校で活躍した新庄さんが、中央大学への進学を決めたのは、「環境の良さと、浦田（春生）監督に惹かれた」からだという。陸上競技部の「東豊田寮」には、快適な住環境に加え充実したトレーニング設備があり、寮の周辺はロード練習に適した環境にある。

そんな環境の良さと浦田監督の指導方針や人柄については、兄の新庄浩太さん（法学部3年）から聞かされていた。中大の駅伝選手の先輩になる浩太さんは、今年正月の箱根駅伝で8区を走り、区間4位の快走をみせた。

「中大、それとも早稲田か日体大かで迷っていた」というが、浩太さんの同僚選手たちからも勧誘され、兄と同じ中大に進学を決めたのだった。今年正月、浩太さんの箱根駅伝の走りを沿道で応援し、「深紅のタスキで箱根駅伝を走りたい」という気持ちをより強く感じたという。

## 襷をつなぐ駅伝が好き

中学生のときに始めた陸上競技は、一貫して長距離ランナーで通している。兄、浩太さんとは中学、高校も一緒で、やはり影響を受けた。「長距離は我慢した分、結果が出たときの喜びが大きいのが良い」という。

大学に入り、高校時代までと一番変わったのは、「自立して練習をするようになった」ことだ。「高校まではほぼ先生の指導で練習していた。大学では、自身でメニューの工夫をして、自分を伸ばしていくようになった」。そこで先輩のアドバイスを受けることもある。

もともとトラック競技よりは、ロードを走る駅伝のほうが好きで、「ひとりではなく、襷をつないでいくことでチームとして戦える。チームのために頑張ろう、という気持ちになる」からという。

その中でもやはり箱根駅伝は大きな存在だ。

### 「新庄兄弟」で箱根路に旋風を

大学4年間の目標は「箱根で優勝する」ことであり、「自分の走りでチームに貢献したい」と意気込む。一緒に走ってみたい選手は、という問いには「東海大の村澤明伸選手、明治大の鎧坂哲哉選手、国士舘大の藤本拓選手」と3人の名前を挙げた。この3人は3、4年生で、一緒に走るには、来年正月の箱根駅伝が限られたチャンスになる。

「期待されるということは強みになる。プレッシャーをプラス志向に考えていきたい」と言って笑顔を見せ、「兄と一緒に箱根を走ってみたい」と晴れの舞台を見据えた。来年の箱根駅伝は、中央大学の「新庄兄弟」が駅伝ファンの大きな話題になるに違いない。

（学生記者　金子小百合＝法学部2年）

ROOKIE 期待のルーキー

# 1500m自由形のユニバーシアード日本代表に ロンドン五輪出場も視野に14分台を目指す

水泳部（法学部1年）**瀧口陽平**さん（湘南工科大学附属高校出身）

第26回ユニバーシアード競泳大会（8月12日～23日、中国・深圳で開催）の日本代表に選ばれた。種目は1500m自由形で、4月の選考会での2位に続いて、5月に行われたジャパンオープンでも2位になり、代表切符を手にした。身長184cmの大型スイマーだ。

### 自己ベストを7秒更新

ジャパンオープンの記録は、15分07秒04と自己ベストを7秒近くも縮めた。しかし、瀧口さんはまったく満足していない。「目標にしていた14分台には届かなかった。次はいけると思います」と前を見据えている。

3歳のときに水泳を始めた。小学校2年生の3月に、「選手をやらないか？」と声をかけられ、以来、記録に挑戦し続ける毎日だ。この間、「水泳をやめたいと思ったことはない」と言い切る。

本格的に日本、そして世界を「しっかり意識するようになった」のは、進路を考える中学校3年生のとき。決めた先は、水泳の強豪校、湘南工科大学附属高校で、入学後に、「よいものを持っているから頑張れ」と言われ、色々な種目に挑戦して可能性を広げた。

### 雰囲気があった中大に入学

「もともと長距離に抵抗はなかった」そうで、高校3年生から本学的に泳ぎ始めた1500m自由形は、「自分でもびっくりするほど相性が良かった」という。高校3年夏の高校総体インターハイでは、15分16秒37の大会新記録で1位になった。

中央大学を選んだのは、「自分がしっかりやれるかどうかを、いろいろな大学に行って見極めた」うえで、高橋雄介監督の人柄や水泳部の雰囲気が一番自分にあっていたからという。中大には高校時代から目標にする先輩や、ともに頑張ってきた仲間もいる。いまは「一日一日を大切に、一生懸命に目の前のやることをやっていく」としっかり先を見つめている。

大学に入ってからは練習の密度が濃くなった。「きのうは、朝7時からの練習で6700m、午後6時からの練習では1万300mを泳ぎました。きついです」と正直に言う。ウェイトトレーニングもやるようになった。今まで「自分がやっていなかっただけ」と言うものの、高校時代の一日一回の練習と比べると練習量は大幅に増えた。

### 攻めの泳ぎをするのが課題

毎日の厳しい練習の先には、来年のロンドン・オリンピック出場を視野に入れている。絶対条件として目標にしていたユニバーシアード出場が決まり、一つのプランは実現した。そして今目標にしているのが、「15分を切って、14分台にタイムを縮めること」だ。

14分台を出すには、「スタートからどれだけ攻

瀧口陽平さん

められるかが大切で、つらく感じるようになる800mから1000mでいかに頑張れるかにかかってきます」という。それには「普段の練習でたくさん泳いで、どれだけ耐えられるかだ」と自らに課題を課している。

「本番はあまり緊張しない」という瀧口さんが、足の震えを経験したことがある。総合優勝3連覇がかかった高校3年のインターハイで、接戦が続き、勝負が決する最後のリレー種目のときだった。主将としての重圧も感じたが、結果は見事チームで優勝を果たした。「水泳は個人種目だからこそ、チームで競うのは特別。大学でもインカレでチーム優勝に貢献したい」ともうひとつの目標達成に意気込んでいる。

（学生記者　渡辺紗希＝法学部2年）

## 中央大学を強くする「文武両道」の学生寮

●東豊田寮

●硬式野球部合宿所

●南平寮